
白銀

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀

【Zコード】

Z4744G

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

引越しをして、犬を飼えるようになった正寛。大きくて言つ事をちゃんと聞く、かしこい弟分が欲しかったのだが…… 小説風景1

2選* 4月* 参加作品です。

(前書き)

イラスト小説企画『小説風景1-2選』<4月> 参加作品です。

小さい頃 それこそ幼稚園の頃から、犬でも猫でもいいから飼つてみたかった。

家は父さんの会社から借りている社宅で、動物は禁止だった。飼いたくても飼えなくて、大泣きしたのよね。と、母さんに今でも繰り返し笑い話にされている。

それが引っ越しになり、建て売りだが一軒家を持つことが決まったのだ。

これは俺にとって、重大な事実だ。

一軒家ならば、動物なんか飼いたい放題！
俺は一人っこだったから、弟分が欲しかった。

そうだ、飼うならばオスの犬がいい。
でっかくて、枕に出来そなぐらい頑丈で、ちゃんと言う事を聞く。かしこい弟。

そう考えるだけで、胸の高鳴りを押さえられない。
一軒家は社宅から遠く、友達とも別れなくてはならない事もあって、両親は犬を飼いたいという意見をのんでくれた。

「正寛、お母さんの友達の犬が子供を産んでね？ 飼い主を探してるつていうから、明日見に行つてこない？」

そんな言葉に、勢いにまかせてうなづきかけたが、中学にあがつたばかりの俺がついていくのは少し恥ずかしかった。
俺が欲しがつていてるんだから、選ぶ権利を笠に行つてもおかしくないのだろうが……親と一緒にというのは、どうにもむずがゆくて。

「母さんにまかせる」

と言つてしまつたのは、失敗だつた。

慣れない学校から帰つてきた俺の目の前にいたのは、大型犬になるとは思えない、とても小さな白い子犬。

小さなダンボールの中で、にらみつけるように見上げてくるソレに、思わず、

「ふつさじくなヤツだな」

と言えば、母さんが飛んできた。

犬は人間の気持ちがわかるのよ！ と頭ごなしに言われたが、ぶれいぐだと思つたもんは仕方ないじゃないか。

しかも母さんが言つには、初めて飼うならメスのほうが飼いやすいから。と聞いて、連れ帰つたのはメス。

途端に、残念な気持ちになつて、興味がなくなつた。
「正寛が欲しいって言つたんだから、散歩もご飯もちゃんとするのよ」

と言われたが、けつきょく母さんが文句を言いながらもしている。

名前は『シロ』とつけられそうになり、ありきたりじゃないかと文句をつければ、怒られた。

だが、けつきょくはシロと呼べば折れそうな細い足で、だが、元気いっぱい走つてくる犬に、俺はせめて、

「白銀しろがねにしよう」

と言つた。そこから彼女は白銀になつた。

しかし、犬を育てるということは意外と大変で。

何度もかみついてくる白銀に、手から血が出たと母は悲鳴をあげていた。

小さい牙はあまりにも細く、とてもとがつていて、しかも問答無用で力強くかみついてくるのだ。

狂つたように走り回り、人間の手や足が目の前に差し出されれば、

大喜びでかみつぐ。

前足や小さな口の届く範囲の物は、すべてひきずり落とし、それはもう見ていて気持ちがいいほどの破壊っぷりで、なんでもボロボロにする。

父さんがまだ読んでない新聞から、買つたばかりの漫画雑誌は当たり前。手すりにかかっているタオルはすぐ糸クズになり、歩くズボンの裾をかみついて離さず、どれだけ破られたことか。ジーンズは特にかみ応えがあつてお気に入りのようだ。

母さんは、限界のようだつた。

だが、めげてもいられないようで、タオルは引っ張つても落ちないよう、手すりにかけタオルの脇を洗濯ばさみでとめ、ローテーブルの上にある物や、白銀の攻撃範囲にあるすべての物は高い位置に移動させられた。

もちろん、俺も白銀の攻撃例外ではなかつた。
構いたくもないと思つてゐるのに、床につけてゐる足にかみつき、逃げれば追いかけてくる。

「このやろりー！」

そう叫んで。それでも蹴飛ばすわけにもいかず、かまれないよう床に転がしてやつた。

最初は、なにが起きたのかわからなかつたように白銀は座つて、俺を見ていた。

しかし次の瞬間、狂つたように飛びかかつてくる。

なんだか知らないが、嬉しかつたらしい。

もう一度、転がそうと手を出せば、いつちょ前に横つ飛びをしてよけ、ななめからかみつこうとした。

いつもしてもかみつかれたくないから、必死に応戦する。

両親はその攻防に大笑いだつた。思いもよらず、明るい家庭の一

田になってしまったたらしい。

もちろん、白銀がかみつくよりも、俺が転がす回数のほうが多かつたから、俺の勝ちだ。

かみついたら、手をこぎつて立ててみたり、指を口の中に入れてみたりと本に載つてるとおりにしてみたが、白銀は強情だった。油断して、血が出るほどひどくかまれたとき、おもわず横つ面をひつぱたいてしまった。

白銀は悲鳴をあげ、たたらを踏んでから座つてうなだれた。その姿に、もちろんかまれた手も、叩いてしまったほうの手も痛かつたが、なにより胸が痛かつた。

「まだ生まれて三ヶ月なのよー。人間の赤ちゃんだと思つてみなさい？ なにもわからない頃でしょう？」

そんな母さんの言葉が、ひどく胸を打つ。

「ごめん、痛かつたな」

そう言つて膝の上に仰向けに乗せ、大きな田を正面から見て。白銀も見つめてくれて。

ぽつりとした腹をなでてやつたら、上田づかいのまま白銀は小さな口を開け、俺の手をかんできやがつた。

だけど、それは痛くなくて。少しは甘がみを覚えたのか？

と思つた途端、本気がみをしてきた。血が出たとこを、またかまれて俺は怒鳴りつけてしまった。

でも、さすがに二回は叩けなかつたけど。

犬用の固いガムとすり替えればいいのだとまた本で見た。しかし、どこからそんな力が出てくるのか、どんなに大きくてもすぐ食べてしまう。

そして、俺の手を狙つてくるのだ。よつて、固い物とのすり替えも有効だが、長持ちはしないという結論になる。

かみつかれたら、耳か鼻をかみつき返せ。という話をネットで見て、やるうとしたら口をかまれた。

よつて、もうこれは一度とやらないと心に誓つた。

*

白銀が家に来て、一ヶ月田のある日。

「正寛、散歩に行つてやつて」

そう母さんに言われ、しぶしぶではあるが細く赤いリードをはめてやり、いまだ慣れない同級生に会わないよう祈りながらスニークーをはいた。

母さんが慌てて飛んでき、白銀に服を着せようとする。ピンク地に白いレースがたくさんついている物で、俺は断固として拒否をした。

すぐ不満そうに母さんは口をとがらせていたが、そんな白銀を連れ歩く俺は、恥ずかしすぎるじゃないか！

ありえない。とてもなくありえない。

しかし散歩をしてみれば、犬の散歩をしている人は多いものだと実感する。

そして、服を着せられている犬の多いこと。

子供と同じというのも、なかなかうなずける。

母さんの白銀に対するファッションセンスは、どうかと思うが、いつも見ると人間と変わらないような服もあるようだ。

服の線もない事はないのかもしけない。だけど、フリフリな服を着た白銀を連れて歩くのだけは勘弁してほしい。

ときおり、知らない散歩人のおねーさんのか、おばさんなのか若い女人から、

「白銀ちゃんでしょう？」

といろんな人に声をかけられる。

おそらく母さんが築き上げてきた犬友達なのだろうと思った。

最初は、逃げ出したい気持ちでいっぱい、俺はひきつった笑顔を作ることでせいいっぱいで。

でも、それが五回以上にもなれば、いくら引っ込みじあんの俺でも慣れてくるもので。

だけど白銀は、相手の犬にも人にも、一番最初に俺に向けた顔をして、俺の後ろから出ようとしない。

「わんこは、本来それが普通だから。気にしなくていいのよ」

とか、

「いつか仲良しになれたら嬉しいわ」

とか言ってくれる人もいたが、あるおばさんは無理に犬同士で『あいさつ』をさせようとして、白銀がパニッシュになり、かみつこうとしたもんだから、俺は必死で取り押された。

そしたら、

「シツケくらい、ちゃんとしなさい！」

などと怒鳴ってきたのだ。勝手に押し付けてきたくせに、そいつに飼われている犬も不幸だと思ったが、とにかく心の中にある一度と口もききたくないリストにそいつを載せた。

白銀には、大丈夫だからついてこい！ と胸をはつて、そいつには別れの挨拶などせずシカトしてやつた。

最近の子は、挨拶もろくに出来ない。などと聞こえよがしに言っていたが、知るもんか。

大人のくせに、ちゃんとシツケされて育つてきてないに違いない。そんな騒ぎをもう忘れたのか、あっちこっちとにおいをかぎまくる小さな白銀を見下ろして、考える。

「なあ、白銀はうちに来て、幸せか？」

自分の名前を呼ばれたからかはわからないが、大きな目をこちらに向けて、フンッと鼻息で返してきた。

そのようすが「当たり前でしょ！」と言っているように聞こえて、思わず笑ってしまった。

そして、生きているといつも事もある。

もちろん俺も周りに溶け込む努力しようとしなかったのが悪かったのだが、新しい学校に慣れないと思つていたら、どうやら俺はじめられていたらしい。

特になにかしてくるわけでもないので、実は気がつかなかつたわけだが、懇切丁寧に教えてきたヤツがいて発覚した。どうも、同じ校区に新しいヤツが入ってきて、挨拶もなしでむかつく。らしい。

一体、誰に挨拶をしたらいいのか？
えてして、そういうヤツは暇人で。

俺としては引っ越してきた隣近所に、家族総出で挨拶回りは終えているので、言いがかりをつけたかつただけだらう。と思っている。体育の時や、給食当番の時なんかが少しめんじくさいだけで、後は特に支障はないから、本気で気がつかなかつた。

教えられたものの、それで傷ついたか？ と聞かれれば、そうでない。と答えるだらう。

きっと、やにつらはソレを聞かされても変わらない俺に、むかついたんだと思う。

今まで自分から馴染もうとしなかつたのが悪い。と思つてゐる俺が、そう簡単に変われるわけがないのだ。

だから、今までどおりにいた。それがまずかつたらしい。

「体育館裏にこい」

そんな昔からあるよつた呼びつけられたをするなんて、思いもよらなかつた。

たしかに教室で取り囲まれたときには、さすがに怖くなつたが、そいつらが離れていつてからは、ちょっと新鮮で、面白くて。

笑いたくなつたが、さすがにそれはやめといた。
聞かれていたら、この身がより危険にさらされるかも知れない。

静まり返つていた教室に、ざわめきが戻つた。

戻つたというよりかは、その前よりも騒々しい。

おそらく聞き耳をたてていた同級生たちが、ことの成り行きを想像しては人の不幸に花を咲かせているのだろう。

だが、だれも俺に話しかけてこないのは、巻き込まれたくないのだろう。まあ実際、俺もそつち側だつたら、同じ行動に出るに違いないが。

それよりも、白銀を叩いてしまつた右手を見る。

ケンカになることは、間違いないのだろう。

叩く前。白銀の行動は、傷つけようとしてではなかつた。純粹に遊びたくて、ただ力がありあまつているだけだつた。

だつたら、今回はどうだ？

あきらかな悪意と、傷つけることに喜びを感じているやつらは、

この右手をふるつても痛みは感じるのだろうか。

この心に、痛みは生じるのだろうか。

だがさつと、俺はもう決めていたのかもしれない。

「お、なんだよ。本当にきたよ」

下卑た笑い声に近付いてくる三人に、さすがに後ずさつた。
男だらうが女だらうが関係ない。怖いもんは、怖いのだ。なにが悪いのか。

「震えちゃつてんじゃねーの？ だつせー」

などと色々と言われていた気もするが、緊張のせいかほとんど覚えていない。

だけど、

「「」こつ、きつたねー犬飼つてんだぜ」

と言われたところから、脳みその回路せつながつた。

「だからどうそんな話になつたのか。自分が口走つたとでも「」つのか？」 まさか。

しかし、どんどん話は進む。

「じゃあ「」れから、お前の犬見かけるたびに遊んでやるからよ」

「なんなら、今から連れて「」こよ。そつしたらお前は見逃してやるから」

「そのまま逃げたら、一生見かけるたびにお前を殴つてやる」

そつと「」つてやつは、笑つた。

「瞬、なにを言われたのかわからなかつた。

白銀を、「」こつらに渡す？ なにを、なにを言つて出してるんだ？」

「」こつらは。

止まつていた脳みそが、フル回転する。

「」の場はおとなしくやつ過「」れ。そつすれば悪くても「」、三発

殴られて終わるだらうから。

そんな事を思つていていたのに、

「いやだね」

知らず、口に出していた。

もし心に思つただけであつても、きっと。絶対に結果は変わらなかつたわつ。

あきらかにその場の空氣は変わつ、一番近くにいたヤツが殴りしかつてきた。

「わからつのかよー。」

怒号をあげるやつは、「」正則防衛だと自分に言い聞かせて右手を握りしめる。

「汚にことしか出来ないヤツに、白銀を触らせられるかよー。」

威勢よく叫んではみたが、勢に無勢つてやつだ。

けつぎよく俺は手を上げられなくて、ボコボコされはしたけど、なにをされても抵抗しなかつた俺につまらなそつに殴打ちをして、あいつらは立ち去つた。

そこかしに痛くて、とても動けそつになかつたけど、勝つた気分だつた。

守るんだ。

俺は白銀の兄貴だからな。

遅咲きの桜が、風にあおられてザワザワと音をたてていた。
暖かい風が頬をなで、痛みを助長させる。

「白銀ちゃんのお兄ちゃん！？」た、大変！

だれかの声が聞こえた。

体育館裏の隣は、土手になつていて犬の散歩をしている人もいる。だから、散歩したときにはた誰かなんだろうけど、目が腫れていてだれなのか判別がつかない。

というか、そんな事を考えるのも億劫だった。

おにいちゃん！

そんな声が、遠のく意識の中で聞こえてくる。
腫れぼつたい目を薄く開ければ、陽の光に輝くような白い耳がうつすらと見えた。

白い着物をきた、小さな少女。

おにいちゃん、だいじょうぶだよ！

しおがねが、そばにいるからね！

やう言つてしがみつき、変わつてしまつた顔をペタペタ触つてく
る。

そこは痛いから、やめてくれ。と言つたよつた言つてないよつた
気がつけば顔中冷たい物体で冷やされている。そして心配そうな
顔でのぞきこむ父さんと母さん。

どうやら自分のベッドに寝かされているようだ。

父さんが低い声で、よく頑張つたな。と言つてくれた。なんでも
氣を失つてから警察やら救急車やらが来て大変だつたらしい。
しかし、俺は今、そんな情報は必要としていなかつた。

「白銀は？」

と聞けば、母さんが白銀をベッドにあげてくれた。
大きな手を、いつもどおりキラキラさせて、喜び勇んで顔をなめ
てくれる。

あのとき見た、輝かんばかりの白い着物が似合つていた少女では
なく、白い毛むくじやらの小さな白銀。

「お母さん、学校に乗り込んでやるからね…」

あまり聞くことが出来ない母さんの怒りに満ちた声に、頬むか
らやめてとだけ言つた。今度は確実に声が出た。

あと、顔が痛いから白銀をどけて。と言えば、難しい顔をしてい
た父さんがやつと小さく笑つた。

不服だつたのだろう白銀は、その小さな身体を駆使して、布団を
引きずりおろそうとしていて笑えた。

「本当に、大丈夫なの？ 後で警察の人間が聞きたくなるから、正直
に話すのよ？」

「うん。俺は兄貴だからね、何も知らない白銀を守るのは、俺の役
目だし」

「なにがあつたのかは、話してもいいと思つたときでいい……でも、
無茶だけはするなよ？」

「わかつてゐる。ありがと、父さん。大丈夫だから。俺は正しいこ
とをしたんだ、簡単に人を傷つけたりなんかしないんだ」

そう言つてやつたら、母さんが口をとがらせ、一矢くらい報いてやつてもいいのよ。と咳き、父さんに止められるのを見て、思わず笑い、痛みと笑いにマジでほんりうつされた。

そうだ。わかつていたんだ。

だれかを殴つたとしても、きっと俺は自分が傷つく。人に手をあげて、なにも感じなくなつた時点で、俺はすべてに歩いて負けなんだ。

布団から手を出して、白銀を探す。

細い前足で抱きつかれ、手首をかまれた。

まだ子供の牙は、甘がみでも痛かつたけれど、いつも通りの白銀が嬉しかつた。

大丈夫。自分はこれからもきっと、大丈夫なんだ。

そう思わせてくれる存在が、すぐそばにいる。

睡魔におそわれて、そんなに大きくは開けていられない目が閉じていく。目が覚めたら、また大変な日常が繰り返されるのかもしない。

でも、それでも自分は大丈夫な気がした。前を向いて、歩いていくんだ。

手首に感じるあたたかな温もりを感じながら、俺は眠りに落ちた。

(後書き)

読んでくださって、ありがとうございます！
初一人称の作品で、なんだか大変ありました>>
もっともっと頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4744g/>

白銀

2010年12月11日14時38分発行